

西淀川記憶あつめ隊

Vol.23



藤木 昇 さん

出来島の地域活動協議
会会長を務めておられ
る藤木昇さんからお話
しを伺いました。

2018年4月27日
聞き取り

◆シャコエビがたくさん
とれた

藤木さんは出来島の隣の太野で生まれ育ちました。1949年のベビーブーム世代です。おじいさんは漁師で、「シャコエビやサルボウガイが、めいっばいとれてたから、大野のまちは貝殻がいっぱいあったよ」とのこと。当時の太野には商店がたくさんあり、買い物は大野で事

足りたそう。小学校・中学校の頃は、夕方になると西向きの風となって、工場から白い煙、黄色い煙が流れてきて、「喉を突くような感じ」になって、外に出られなかったのだそうです。

お父さんは淀川製鋼に勤務していました。藤木さんは高校卒業後、西淀川郵便局で働きます。「当時の太野は人がよくおったけれど、僕らの世代が親の仕事を継がずに外に出てしまった」。

◆少年野球のコーチを引き
受ける

20代で転職して、天満橋のOMビルで婦人服の営業をしていましたが、大川で行われていた出初め式を見て「消防隊員も面白そう」と思い、大阪市の消防士試験を受けて合格。西淀川や北区、此花区で勤務し、定年まで勤め上げます。佃の消防署に通勤している時に、出来

島で建売住宅が売り出されているのを見て、出来島に引っ越そうと考え、1977年に引っ越してきました。

地域のことに関わりはじめたのは、35歳くらいの時。息子さんが出来島小学校の4年生で、地域の野球チームに入った際に、「遊ぶという草野球」だった藤木さんはコーチを引き受けました。10年ほど引退し、子ども会の副会長になっていた時に、サッカーチームが巻き起こります。出来島小学校の校長先生から地域でサッカー部を創ることが提案され、子ども会で呼びかけたところ40人も集まりました。藤

木さんはサッカー未経験でしたが、ルールブックを購入して一から勉強して、監督として面倒を見たそうです。途中から野



子ども会で出店した御堂筋パレード

球も面倒を見ることになり、一日6か所試合をしている会場を渡り歩くなど、「一人では身体が持たない」状態に。55歳で野球とサッカーの指導は後輩に譲り、子ども会の活動に専念するようになりました。

「出来島の子どもたちはよくみただ。試合の移動など、子どもと父母ともよく話し合って、みんなであつとつ協力し合ったよ」と語る藤木さんから、ほんまに子どもが大好きというオーラを感じました。

◆ええまち出来島

定年後は町会長を引き受け、2年後に連合町会長を務めることになりました。「寝ても覚めても今は地域のことを考えて

いる」という藤木さん。インタビュをした日もコミュニケーション会館と出来島会館での行事が立て込んでおり、いろんな調整で忙しいそうです。

出来島は多文化共生にも積極的に取り組



大和田川公園でサッカーの指導

んでおり、南米系の住民が増えている中、公園でのサッカーや、マナーなど文化の違いからいろいろな問題が起きています。が、一つ一つ対話をして解決している様子が見て取れました。「西淀川のええところって言われても、ずつとおるからわからへんけど、出来島は町会の役員が協力的。いろんな行事をしていけるけれど参加率が高くて、やりがいがある地域。地域を自分たちで作ってきた」と笑顔で答えてくれました。「ええまちちゃいまっか」といった一言が、街を明るくしているように感じました。林